

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 21 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520993

研究課題名(和文) 海洋生物観光の実践現場における生態リスク意識と当事者参加型の予防的資源管理体制

研究課題名(英文) Ecological risk perception of diving guides and community-based resource management system in marine wildlife tourism

研究代表者

市野澤 潤平 (Ichinosawa, Jumpei)

宮城学院女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：10582661

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、主にタイのダイビング観光業者への参与的観察によって、以下のことを明らかにした。

ダイビング業界では、観光客に対して事故リスクの軽減手段を販売するという、事故リスクの資源化が中心的な職業実践となっている。また事故リスク(の管理)は、短期的な売り上げの大小に関わる問題だが、生態リスクは、遙かに長期的なスパンで考える事象である。このような、考慮すべきリスクの、深刻度・重要性および時間スパンの違いが、ダイビング・ガイドたちによるリスク対応への優先度の違いを生んでいる。つまり、ダイビング・ガイドたちが、長期的な生態リスクよりもより短期的なリスク管理に注力せざるを得ない、構造的な理由が存在する。

研究成果の概要(英文)：Through a case study of diving tourism in Thailand, this research illustrates the risk perception of diving guides.

As it requires human beings to stay underwater for a long time, scuba diving is also an activity inherently dangerous. Therefore, unlike other tourist activities, divers need to pay much attention to safety and risk management. Usually, it is difficult for most divers to manage various risk factors during diving activities on their own account.

The scuba diving industry commercializes risk management practices represented in the necessary education of divers. In addition to entertaining customers, the diving industry makes profits out of both providing educational opportunities for divers and selling diving-related qualifications, required for anyone participating in a diving tour. Such characteristics of diving industry make diving guides to be more conscious of their responsibility on accident (injury) risk management rather than ecological risk management.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ダイビング観光 リスク認知 リスクの資源化 生態リスク 環境保護意識

1. 研究開始当初の背景

(1) 非消費的利用：海棲生物利用の研究における未開拓の領域

サンゴ礁域では、漁業という消費的な海棲生物の利用に代わり、観光を中心とする非消費的利用が、より大きな経済効果を生み出すようになった。しかし、非消費的利用の実態を描き出す研究は未だに寡少であり、海洋観光開発、水産業と自然保護団体とのポリティクス、観光行動学などの視座に限られている。本研究は、海棲生物の「見る」利用である漁業と、「見る」利用である海洋生物観光 (marine wildlife tourism) とが、全く異なる実践の論理に基づく活動であることを指摘し、漁業研究の延長に留まらない新たな研究領域としての、非消費的利用の人類学を構想するものである。

(2) 非消費的利用における環境破壊 / 資源管理の問題

海洋生物観光による間接的な環境破壊は深刻で、持続可能性が危ぶまれている。ところが、先行研究の多くは、観光活動とサンゴ減少との量的相関や観光客の環境意識をサーベイするに留まり、現場の実情に即した有効な資源管理モデルの構築には至っていない。観光活動が海洋生態系を破壊する因果関係を、明確に特定 / 測定するのは、困難である。ゆえに、観光の現場当事者を巻き込んでの高度に予防的な管理体制が必要となるが、タイ南部の漁業において近年盛んとなっている住民参加型資源管理の試みも、同地の海洋観光には全く導入できていない。

2. 研究の目的

(1) 海棲生物の「見る」資源化の様相

本研究は、価値が文化的に創出されるという人類学的な観点に立ち、従来は漁業資源であった海棲生物が、観光という新たな文脈において「見る」資源として賦活される過程とメカニズムに着目する。その上で、海棲生物を「見る」という体験の商品化、及びその提供と消費を通じて「楽しみ」を生む活動が、国際観光産業の川上から川下に至る各レベルの協同によっていかに達成されているのかを、明らかにする。

(2) 職業実践における不確実性とリスク

上記の知見に基づき、漁業とは全く異なる仕事の性質および事業環境条件が、海洋生物観光の当事者たちによる業務上の不確実性へ対処する実践と生態リスク観を、いかなる形で構築しているのかを明らかにする。

(3) 資源管理をめぐる現場の人々の意識と行動

加えて、観光活動の当事者による海棲生物の非消費的利用をめぐる不確実性への対処とリスク観の独自性と、消費的利用を前提に構築された資源管理モデルとの間の齟齬が、海洋生物観光における資源管理の機能不全

を招く重要な要因となることを、環境条件が異なる複数のフィールドにおける比較調査を通じて立証する。

3. 研究の方法

本研究は、海洋生物観光の運営者たちの行動と思考を明らかにすることを通じて、非消費的利用の実態に即した海棲生物資源の管理体制を模索する、個人研究である。したがって、観光の現場での参与的調査とインタビューを中心とするインテンシブな現地調査を主要な研究手段とする。

中心的な調査地域となったのは、タイ南部であるが、補足的にタイ以外の東南アジア (マレーシア)、沖縄、東京・大阪・名古屋などの国内主要都市 (ダイビング観光業者へのインタビューなど) においても調査を行った。タイにおいては、主に、現地で開催されるダイビング・ツアーに同行しての実態調査を実施した。

主な着目点としたのは、当事者たちによる、海棲生物の「見る」資源としての価値付けのメカニズム、「見る」利用における慣習的ルール・制度、特定の海棲生物を「見る」ことができるかどうかをめぐる不確実性への対応、資源量や生態リスクの見積もり、資源保全をめぐる意識と行動、希少資源をめぐる競争と葛藤、である。

具体的な調査方法としては、参与的アプローチにより、ツアー参加者たちのポート上での会話、水中でのダイバーたちの行動、関係者へのインタビュー、を中心に記録した。ダイバーによる珊瑚の破壊などに関する既存の研究においては、着目点がダイバーの属性と環境意識の相関などに限定されていたのに対し、本調査は、ホスト側とゲスト側双方の行動 / 思考およびコミュニケーションを包括的に記録することを心がけた。

4. 研究成果

本研究が主に注目したのは、「サービス事業者」としてのダイビング業者 (特に現場で顧客対応をするダイビング・ガイド) の観点において、職業実践に関わるリスクがどのような形で認識され、また対処されているかという点である。

ダイビング観光を運営するホスト側である事業者たち (とりわけダイビング・ガイドたち) は、海洋生態系の破壊を憂慮し、保全の必要性を強く感じている。しかも、少なくとも本研究における調査結果が示唆する限り、タイのダイビング業界で働く者たちは、自らの生業活動が資源枯渇を招く要因となっていることを、多かれ少なかれ経験的な理解として承知している。それにも関わらず、業界全体としては環境に過重な負荷をかけた続けているのが、現実である。そのような矛盾がなぜ生じるのか。一因には、経済利潤の

過度な追求が当然考えられる。利益追求を優先するあまり、環境保護をおざなりにしてしまうという例は、世界各地の観光開発の現場においては、普遍的に観察される。しかしながら、本調査の結果は、そうした一般的な意味での経済的利潤への欲望に加えて、ダイビング事業者（特にダイビング・ガイドたち）が置かれている独特なリスク状況（およびそのなかで構築されるリスク認知とリスク対応への構え）が、関与していることを、明らかにした。

サービス関連産業の従事者による業務上の不確実性とリスクへの対応は、それが業務の性質と環境条件に応じて多岐にわたるが、タイのダイビング観光の現場従業者たちが直面する不確実性とリスクは、海という特殊な環境を舞台とする故に、通常の接客・娯楽サービスとは大きく異なるものとなっている。また、客に野生生物を見せるという業務の性質ゆえに、同じく海を舞台とする生業である漁業の場合とも、不確実性とリスクの様相は、大きく異なる。

ダイビング・ガイドの活動は、海という自然環境を舞台にしながらも、基本的には「接客」であるため、不確実性を生む母胎である、事業者と海棲生物資源の二者間関係に、客という追加の第三者が介入してくる。この客という存在との関わりが、観光現場の職業実践をめぐる複雑さを高める。その独特なリスク認知および対応のありようが、ダイビング観光の拡大が、珊瑚の破壊や海棲生物の生息数の現象、さらには特定生物種の局地的な絶滅にいたる事態を招く可能性、すなわち生態リスクのとらえ方、および生態リスクへの対処の仕方に、影響を与えていることを、本研究では確認した。

通常、タイなどのビーチリゾートを訪れるダイビング観光客は、1日に2回から4回程度の潜水を行う。1回のダイビングに際して、通常は1本のタンクを使用し、30分から60分程度、海中に滞在する。スクーバ・ダイビングは、呼吸のための器材を使用しないフリーダイビングとは異なり、水面下に滞在する時間が長く、また水中で活発に活動するために、種々の危険を伴う。ダイビングに伴う危険とは、例えば、水中での空気切れ、冷たい海水による低体温症、体内の空隙（空気が存在する部位）が水圧に影響されて痛みを引き起こすスクイズ、急浮上によって膨張した空気が肺を破裂させる肺の過膨張障害、深深度からの急浮上により血液中に溶け込んでいた窒素が気泡化することによって引き起こされる減圧症などである。ダイビングは通常、海の解放水域で実施されるため、高潮や潮流に巻き込まれたり、船の揺れによって転倒したり、といった可能性もある。また、ダイビング観光客は水中生物の観察を好むために、ある種のウニやオコゼなどの毒を持つ生物と接触する可能性も、排除しきれない。ダイビング・ガイドの職責において最優先されて

いるのは、こうした危険から客を守ることであり、観光・娯楽ガイドとしての楽しみの提供は、あくまでも安全確保の土台があっただけで成り立つものと考えられている。こうした状況は、たとえば旅客機の客室乗務員において、第一の職責は安全管理と危機対応であるとされているのと似ている。しかし、客室乗務員においては、実際に危機対応が必要になる局面は少なく、通常業務においてはいかに乗客に快適に過ごしてもらうかの接客とホスピタリティ発揮が仕事量の大部分を占めるのに対し、ダイビング・ガイドの場合は、安全管理と危機対応こそが、実際の業務における中心的な位置を占めている。楽しさを与える観光ガイドでありながら、主要な業務は顧客の安全管理であるという点が、重要な特徴である。

こうした現場業務の性質に加えて、ダイビング業界の構造が、ダイビング・ガイドたちの業務上の関心と注力先を、安全管理と危機管理に集中的に向けていく動因となっている点も、重要である。ダイビングは、窒息死を始めとする、様々な身体的リスクの源泉でもあるため、名所見物やショッピングなどの通常の観光活動は異なり、一般人が誰からの指導も受けずに単独で始めることは困難である。そこで、初心者ダイバーとして教育することを主要なミッションとする、国際的なダイビング指導団体が、複数存在している。現在、タイを含む世界のほとんどの地域のダイビング業界は、そのような指導団体の影響下にある。具体的には、ダイビング・ショップと、そこで働くダイビング・ガイドやインストラクターたちは、ある特定のダイビング指導団体のメンバーとなり、指導団体から安全管理上の知識・技能と、ビジネス・ノウハウの提供を受けている。いずれかの指導団体の傘下に入らずにダイビング観光業を営むことは、事実上困難である。こうした、（複数の）ダイビング指導団体による独占的な構造が、ダイビング業界のあり方を大きく規定している。

ダイビング指導団体の基本的なビジネスモデルは、「安全」と「安心」の販売である。ダイビング観光客に、（参加のダイビング・ショップとガイド/インストラクターを通じて）安全にダイビングをするためのノウハウを販売すること、すなわちダイバーへのリスク管理の教育と訓練を、ビジネスとして確立している。ダイビング中に発生する可能性のある、身体への危害を伴う事故は、「望ましくない」ものであるが、「望ましくない」からこそ、その回避と対応のための教育が、市場への大きな訴求力をもつ。ダイビング指導団体は、ダイバーたちにダイビングの危険とリスクを教え込むことを通じて、大きなリスク・ビジネスの市場を生み出しているのである。

結果として、タイにおけるダイビング観光の現場においても、ダイバー客に対して事故

リスクの軽減手段を販売するという、事故リスクの資源化が中心的な職業実践となっている。そして、事故リスク(の管理)は、短期的な売り上げの大小に結びつく問題だが、生態リスクは、遙かに長期的なスパンで考える事象である。珊瑚礁の荒廃や生物種・個体数の減少は、数年または数十年をかけて進行する漸進的な過程であるが、それがゆえに、今まさに生じるかもしれない事故リスクに比して、ダイビング・ガイドたちのリスク認知図においての後景に追いやられがちになるのである。生物種の減少などの変化は、水中で生じるため、仮に漠然とした経験的認識があっても、事態の明確な測定と、その事態を引き起こした因果関係を明示しづらいという要件も、やはり生態リスクへの関心がいわば「後回し」になりがちな土壌の形成に寄与している。このような、考慮すべきリスクの、深刻度・重要性および時間スパンの違いが、ダイビング・ガイドたちによるリスク対応への優先度の違いを生んでいる。つまり、ダイビング・ガイドたちが、長期的な生態リスクよりもより短期的なリスク管理に注力せざるを得ない、構造的な理由が存在するのである。

本研究の計画段階では、ダイビング事業者たちが、自らの活動が自然を破壊しているという意識を持ちながら、生態リスクの問題を結果として等閑視してしまっている現状を生み出している要因を明らかにした上で、当事者たちが資源管理の実践に積極的に参与して「コモンの悲劇」を避けることを可能とする、予防的な体制作りに必要な条件を見いだすことを目的に据えたが、3年の期間内にそこまでの達成を得ることはできなかった。しかしながら、ダイビング事業者たちにおけるリスク認知(およびその認知を生み出す状況要因、業界構造)のあり方を明らかにし、生態リスク意識との関わり(ひいては環境保護行動が実効性のある形で業界内に生じて来づらい要因)を説明したことは、リスク研究の文脈で一定の成果と見なすことができる。今後は、本研究の成果をさらに展開させ、ダイビング観光と環境問題を巡る複雑な状況のさらなる解明に努めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

小河久志、市野澤潤平、「タイ南部沿岸における観光開発と漁業：プラチュワップキーリカン県バーンサパーン湾を事例として」、宮城学院女子大学研究論文集、査読無し、第 116 号、2013、pp.39-59

〔学会発表〕(計 4 件)

市野澤潤平「楽園のコンシェルジュ：プーケットの日系ダイビング・ガイドの事

例にみる「楽園」の裏側」、日本文化人類学会第 48 回研究大会(2014 年 5 月 17 日、幕張メッセ)

市野澤潤平「浸潤 される身体をめぐる不確実性と累積的リスク：観光ダイビングの経験における減圧症の問題」、日本文化人類学会第 47 回研究大会(2013 年 6 月 8 日、慶応大学)

市野澤潤平「自己と 異物 の見えない関係：身体と外部との『境界』をめぐる不確実性」、日本文化人類学会第 47 回研究大会(2013 年 6 月 8 日、慶応大学)

市野澤潤平「マスツーリズムと『エコツーリズム』：タイ南部プーケット島のダイビング観光業における「環境保護」意識」、日本文化人類学会第 46 回研究大会(2012 年 6 月 23-24 日、広島大学)

〔図書〕(計 1 件)

東賢太朗、市野澤潤平、木村周平、飯田卓(共編著)『リスクの人類学：不確実な世界を生きる』、2014、世界思想社、346p

市野澤潤平、「風評災害に立ち向かおう：インド洋津波に襲われたプーケットの経験に学ぶ」、総合観光学会編、『復興ツーリズム：観光学からのメッセージ』同文館出版、2013、pp.93-100

6. 研究組織

(1)研究代表者

市野澤 潤平(ICHINOSAWA, Jumpei)

宮城学院女子大学学芸学部准教授

研究者番号：10582661